

## 屎尿浄化槽の変遷

便所の様式は当然、人々の生活様式の変化に伴って変遷する。この原則にたつて、日本の変遷を推定すると、狩猟生活をしてきた石器時代の大部分は固定した便所を持たず、適当に山野で用を足していたものと思われる。今日でも一部で、便所のことを「おやま」というが、これなどはその形式を端的に表現したものだといえる。

縄文後期以後、焼畑農業、米作農業が行われるようになってからは人々の生活も定住的となり、同時に固定した便所が発達し、それ以後、農耕文化とともに汲取便所が長く日本人の生活と直結し、現代に至ったと解される。

今日では水洗便所が著しく普及しているので、汲取便所についての関心がうすれる傾向にあるが、このような状況を招いたのは、極く最近であつて、昭和30年代は、まだ大都市の真中で、屎尿汲取桶の山積風景が極く普通に見られ、大都市の屎尿も肥料の重要な資源であつた。

便所の別名、「かわや」には種々の漢字があてられ、このことは同時に日本の便所の起源が多源的で、どれか一つに断定しようとするのが無理であることを示している。？、厠、側屋、川屋などはその代表的なもので、？は豚便所、側屋は便所が主屋から区別されて別棟であつたこと、川屋は水洗式であつたことなどを示唆している。

日本では汲取便所が石器時代後期から現代まで長い間、便所の主役を演じてきたが、明治以後、ヨーロッパ風の生活様式が多く取り入れられるようになり、それにつれて水洗式便所が次第に増加してきた。とくに昭和40年代以降は下水道及び屎尿浄化槽の普及が著しく、それにつれて汲取便所は減少する傾向にある。

水洗便所はこのように、ヨーロッパ風の生活様式に伴って近代的便所の主役になりつつあるが、水洗便所を広義に解釈すれば、弥生時代から古墳時代初期にかけて、高野山式の川屋もかなりあつたのではなからうか。古事記の「ぬり矢物語」を待つまでもなく、日本民族の一部には揚子江以南からの渡来者が加入しており、これらが特に農耕文化に重要な役割を果たしたと考えられるので、現在側屋を主体とし、川屋を特殊少数例と考えられるが、初期にはかなりの数の川屋も存在していたのではないかと推定される。

便所の水洗化に付随して発達した屎尿浄化槽について、変遷を大別すると

第1期	屎尿浄化槽の必要性が検討され、開発された明治から昭和20年代にいたるまで
第2期	種々の水洗便所が現れ、公害問題が起こり、その見直しとしての構造基準を建設省告示で定めた昭和44年まで
第3期	それ以後、屎尿浄化槽の普及が進み、水質汚濁防止法上、合併処理施設の改善や高度処理方式の開発を必要とした現在まで